

18世紀ドイツの文学的状况 (3)

—シュトルム・ウント・ドラングから古典主義へ—

藤 本 正 幸

Der literarische Zustand des 18. Jahrhunderts Deutschland (3)

—vom Sturm und Drang zur Klassik—

Masayuki FUJIMOTO

Als Johann Wolfgang Goethe am 7. November 1775 in der Residenz des Herzogtams Sachsen Weimar Eisenach eingetroffen war, war die neue Welt für ihn noch nicht verbürgt. Die Lage seit dem Sturm und Drang war ganz unübersichtlich geworden. Und er war sich auch nicht darüber im Klaren gewesen, daß ein festes Ganzes, das von Willkür und Zufall nicht abhängt, einzig aus einem Bündnis zwischen dem Innern und dem Allgemeinen entstehen kann. In Weimar wirkte und leidete Goethe mit dem Ganzen und fühlte sich in einem Ganzen. Frau von Stein war älter als er und ging ihm voran. Sie war unter allen Frauen im Leben Goethes die größte Bedeutung. Seit der Begegnung mit ihr war Goethes Bemühen im Grunde darauf gerichtet, Grenzen der Menschheit anzuerkennen und sich im Bereich des Menschen einzurichten und zu bescheiden. Eine neue Welt schloß sich ihm in der Liebe zu Frau Stein auf. Wir können aus jeder Zeile einen verwandelten Goethe kennenlernen. Die Epoche in Weimar ist eine unerläßliche Phase in der Geschichte des deutschen Geistes. Egmont verbirgt ersten Erfolg in der Weimarer Zeit. Götz preiste die Freiheit als sein höchstes Gut. Egmont war mit allgemeinen Gesetzen einverstanden. Dies war die Ansicht Goethes. Sein ganzes Leben näherte sich mit der Zeit antiker Form und erwarb sich die Ruhe. Er ermöglichte erst den festen Blick auf die Gegenstände, nicht mehr nur eigene Träume und Wünsche. Das kennzeichnete den Übergang von Sturm und Drang zur geformten Reife des klassischen Stils.

18世紀、ドイツ市民階級に生まれた啓蒙主義の合理主義的世界観は、世紀の半ばになると、その反動として、自由な発想を求めた非合理主義的世界観を生み出すことになった。シュトルム・ウント・ドラングの運動である。青年期のゲーテ、シラーを中心としたこの運動はドイツの文学に感情の解放を、生の充実感をもたらし、斬新な息吹を与えることに成功した。しかし、文学の革新を叫び、いかなる束縛や規則を認めず、創造的自由を求めたため、余りにも主観主義的な性格を強めた。そのため、70年代半ばには、はやくも退潮の兆しを見せ、新たな局面を

むかえることになった。

1

シュトルム・ウント・ドラングの限界を感じていたゲーテが、招聘されワイマールの地に到着したのは1775年のことであった。当時人口わずか6000、牧畜以外主なる産業もないこの一地方都市が、ゲーテにより、やがてドイツ古典文学の発祥の地となるのである。

——私は民衆とその教育のために私の全生涯を打ちこんできた。……一万人の詩人とわずかな住民が住んでいると冗談でいわれるほどのこのちっぽけな首都ワイマールで¹⁾……と述べたゲーテにとって、このワイマールはいかなる地であったのか。

Ich bin nun ganz in alle Hof- und politische Händel verwickelt und werde fast nicht wieder weg können. Meine Lage ist vorteilhaft genug, und die Herzogthümer Weimar und Eisenach immer ein Schauplatz, um zu ersuchen, wie einem die Weltrolle zu Gesichte stünde. Ich übereile mich drum nicht, und Freiheit und Gnüge werden die Hauptconditionen der neuen Einrichtung seyn,²⁾

——私は今や完全に宮廷や政治的問題に巻きこまれ、ほとんど立ち去ることは不可能でしょう。私の置かれた状況は、だが充分好都合なものでもあるのです。ワイマール・アイゼナッハ公国は、自らにいかなる役目がふさわしいかを試みることが出来る舞台なのです。それ故、私は急ぐつもりはありません。自由と満足とがこの新しい秩序の主たる条件となるでしょう……

当時、すでにヨーロッパ有数の大都会フランクフルトからやってきたゲーテは、最初この小地方都市に定住する意図は持っていなかった。しかし、カール・アウグスト公の補佐役として、助言者として国政に参加することになる。彼はシュトルム・ウント・ドラング期の自由奔放な生活に区切りをつけ、新たな第一歩を踏み出すことになった。……私はここで、人生 (Leben) に眼を向けているのです。そして人生もまた私に眼を向けているのです。ワイマール到着後、翌2月、自らの決意を手紙にて述べている。

1) Mittwoch den 27. April 1825

Echermann Gespräche mit Goethe F. A BROCKHAUS·WIEABADEN s. 436

2) An Merck Weimar, den 22. Januar 1776

Goethe Briefe Band 1 Christian Wegner Verlag Hamburg s. 205

Ich werd auch wohl dableiben und meine Rolle so gut spielen als ich kann und so lang als mir's und dem Schicksaal beliebt. Wär's auch nur auf ein paar Jahre, ist doch immer besser als das untätige Leben zu Hause wo ich mit der grössten Lust nichts thun kann. Hier hab ich doch ein paar Herzogthümer vor mir. Jetzt bin ich dran das Land nur kennen zu lernen, das macht mir schon viel spaas. Und der Herzog kriegt auch dadurch Liebe zur Arbeit,³⁾

——私自身が、そして私の運命が望む限り、私はここに滞在し、出来るだけ自らの務めを果たそうと思います。たとえ、それが数年であったとしても、大いなる快樂でもっては何もなしえなかった故郷の無為な生活よりはるかにすばらしいものです。ここには、私の眼の前に二つの公爵領があります。今、私は国を知らねばなりません。そのことが私にはより興味のあることなのです。公爵もまたそのことによって仕事への情熱を見い出しました。——

Und wenn ich unklug Mut und Freiheit sang
 Und Redlichkeit und Freiheit sonder Zwang,
 Stolz auf sich selbst und herzliches Behagen,
 Erwarb ich mir der Menschen schöne Gunst;
 Doch ach! ein Gott versagte mir die Kunst,
 Die arme Kunst, mich künstlich zu betragen.
 Nun sitz' ich hier, zugleich erhoben und gedrückt,
 Unschuldig und gestraft, und schuldig und beglückt.⁴⁾

私は前後もわきまえず勇氣と自由を、
 とらわれのない正義と自由を歌って、
 誇らしくも思い、快くも思い
 人々の喝采も受けたものだった。
 しかしながら神は私に、
 みずから偽るすべてを授けてくれなかった。
 それ故私はここに、心を昂揚させながら銷沈し、
 罪なくして罰を感じ、罪を感じつつ幸福の思ひにひたる。

3) An Johanna Fablmer Goethes Briefe Band 1 s. 207

4) Ilmenau am 3. September 1783 s. 107

(松本道介訳)

この詩はカール・アウグスト公の誕生日に捧げられたものである。ゲーテ自身が一人の歴史的人物として描かれ、自らのシュトルム・ウント・ドラング期から現在に至る心境の変化を歌っている。自由奔放な観念の世界に雄飛することを拒み、現実在即し自らを制御する決意を表明している。シュトルム・ウント・ドラング期における個人と社会との対立から脱却し、全体の中で全体と共に活動するという認識をもつ。彼はこのワイマールにおいて、一つの全体の中にある自分を感じることができたのである。

2

1775年、ゲーテは戯曲「エグモント」に着手し、イタリア体験を経て1787年に完結している。この作品は、1773年に発表された「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」と同じく、史実に基づいた歴史的、政治的素材を取り扱ったものである。

シュトルム・ラント・ドラング期を代表する戯曲となった「ゲッツ」は、ゲーテのシュトラウスブルク時代にすでに計画されていた。この作品は16世紀を舞台とした歴史的現実を描いた史劇である。主人公の死以外は、伝記に従いかなり忠実に筋を進めている。この作品ではシュトルム・ウント・ドラング期の「自由への熱望」が主要テーマになり、直接的に表現された。しかし、同時期に発表された「五月の歌」や「ガニナート」に見られる抒情性は無視されている。歌われる対象そのものが詩人の心の中で溶け合い、混り合い、主体化され、みずから言語になるという、彼の作詩法は見られない。終始、散文を用いて客観的に描かれている。宗教改革から農民戦争へとつづく混乱した社会状況の下で、私腹をこやし、民衆に圧制を強いた諸侯や僧侶に対し、あくまで自己を主張する正義感と勇気にあふれた騎士ゲッツなのである。このような主人公が時代の腐敗に反抗し没落するというテーマは、自由を求め文学のみならず社会に対しても、不満と憤りを抱いていた当時の青年層を熱狂させたのである。

「エグモント」も同様に史実に素材を求めている。スペインの支配下にあったネーデルランドの解放運動をテーマにして描かれ、主人公エグモントは捕えられ死刑を宣告される。筋の運びはゲッツと同じである。しかし、シュトルム・ウント・ドラング期に書かれた「ゲッツ」と、ワイマールとイタリアを体験した後に完成したこの「エグモント」は明らかに違ったものとなった。確かに、第二幕、第一場に見られるような、圧制に憤りを表明す民衆の登場場面は「ゲッツ」を思いおこさせるものがある。だが、「ゲッツ」に見られるような、反抗し自由を求めるといふ歴史的、政治的事実には重きをおいていない。彼は人間的な主人公としてエグモント

を描いている。史実におけるエグモントはすでに46才で、12人の子供を持つ、ネーデルランドの裕福な貴族であった。武勇の誉高く、正義と自由を愛し、その領域における善政は民衆の信望を集めていた。ゲーテは、このエグモントを多感な未婚の青年に置きかえ、善良で、快活な、人間的な性格を与えている。

第5幕 第4場において、エグモントは死刑の宣告を告げに牢獄までやってきた宿敵アルパレスの息子フェルディナンドに次のように述べている。

——もうひとつだけ……私は一人の娘をよく知っている。彼女が私のものだったからといって、君は彼女を軽蔑することはないだろう。彼女を君に預けるいま、私は安心して死ぬるのだ。君は高貴な男性だ。ひとりの女性がそんな君に会えたら、危険から守られることになる。——

彼は自分の恋人クレールヒェンの将来をフェルデナンドにあっさり託している。ゲッツに見られた情熱と奔放さ、巨人主義的感情の爆発、不屈の意志はもはやエグモントには見られない。

»Und wozu wären denn die Poeten, wenn sie bloß die Geschichte eines Historikers wiederholen wollten! Der Dichter muß weiter gehen und uns womöglich etwas Höheres und Besseres geben. Die Charaktere des Sophokles tragen alle etwas von der hohen Seele des großen Dichters, so wie Charaktere des Shakespeare von der seinigen. Und so ist es recht und so soll man es machen. Ja Shakespeare geht noch weiter und macht seine Römer zu Engländern, und zwar wieder mit Recht, denn sonst hätte ihn seine Nation nicht verstanden.«⁵⁾

——もし、詩人が歴史家の説く歴史を、そのまま繰り返すだけなら、一体詩人は何のために存在するのだろうか！詩人は歴史を乗り越えて、できるかぎり、もっと高いもの、もっとよいものを、与えてくれなければ嘘である。ソポクレスの描く人物は、すべてこの偉大な詩人の崇高な魂の何らかの意味での分身であり、シェークスピアの人物もまたシェークスピアの魂の何らかの意味での分身なのだ。これは正しいことだし、またそうしなければいけない。それどころか、シェークスピアは、さらに筆をすすめて、ローマ人をさえイギリス人に仕立ててしまっているが、これもまた正しいのだ。というのは、そうしなければ、国民は彼を理解しな

5) Mittwoch den 31. Januar 1827 s. 175

ったであらう。——

史実の伝えるままに、もしエグモントを12人の子持ちの父親に描こうとすれば、戯曲における彼のうかつな行動は、筋の通らないものに見えてしまうであらう。だから、もう一人別のエグモントを、彼の行動とも、自らの作家的意図とも、いっそううまく釣り合うようなエグモントを、つくりあげる必要があったのだ。とゲーテはエッカーマンに述べている。

このことは、「ゲッツ」「エグモント」両作品の基本テーマ「自由」の取り扱い方に大きな相違点を与えている。

「ゲッツ」における「自由」は、あくまで個人的自由であった。シュトルム・ウント・ドラングの「自我」が「自由」を要求するのである。全体の自由は表現されていない。

ゲッツ最後の死の場面での会話である。

エリザベート いいえ、あの子はミルテンベルクで討ち死にしたんです。自由のために獅子のように戦ったんです。

ゲッツ それはよかった。あれはこの世界中で一番の若者だった。勇ましかった——ああ、これで私の魂は離れて行ってもよい——かわいそうなおまえ、おまえをこの腐った世に残して行くのか！—— ……おお、天国の空気だ——自由だ！自由だ！（死ぬ）

エリザベート 自由は天国に、天国のあなたのところにあるのです。この世は牢獄です。

エグモントにおける「自由」の表現は違った様相をおびている。

第二幕 第一場において、ある男の煽動により暴動寸前の民衆に向かい、エグモントは次のように警告している。

——君たちの務めは平静の維持だ、みんなですべてを実行しろ。かなり悪くみられているからな。国王をこれ以上刺激するな、結局のところ武力を握っておられるんだ。まともな市民が実直かつ勤勉に生業を営むかぎり、どこでも必要なだけの自由は与えられている。——

——あらゆる援助を君たちに与えよう。すでに処置は取られている。災害に断固としてたち向かうためだ。外国の教えに揺さぶられるな、謀叛によって特権が確保されるなどと信じるな。うちにこもっている。彼らが街頭で徒党を組むのを許すなよ！分別ある連中にできることは多いからな。——

ゲッツの自由に対する情熱や奔放さはエグモントには見られない。常識的で、いたって物わかりのよい主人公である。エグモントはゲッツのごとく、偉大な「個人の自由」をかかげ、奔放にふるまい、自ら責任をとることはできない。ここでは、あくまで「全体の自由」が問題と

なっているのだ。

第四幕 第二場におけるアルパレスの言葉は、古典期にむかうゲーテ自身の、自由に対する疑問を表明している。

——自由だと！美しい言葉だ、それを誰が正しく理解しているというのか！どのような自由を彼らは欲しているのか？ 最も自由な人における自由とは何なのだ？ それは正義を行う事だ！……彼らはおのれの自由を信じないのだ、自分と他人を傷つけることができぬかぎりは。……もし外敵が押し寄せてきたら……途端に彼らはお互い同志不和になり、言うなれば、おのれの敵と結託するのだ……

ゲーテはより普遍的秩序の必要性を説いている。「ゲッツ」においては、個人的自由を熱狂的に支持したゲーテも、この時期、全体の自由はやがて普遍的秩序の崩壊につながるという認識を持つのである。「詩と真実」の中において次のように述べている。

Nachdem ich im „Götz von Berlichingen“ das Symbol einer bedeutenden Weltepoche nach meiner Art abgespiegelt hatte, sah ich mich nach einem ähnlichen Wendepunkt der Staatengeschichte sorgfältig um. Der Aufstand der Niederlande gewann meine Aufmerksamkeit; in „Götz“ war es ein tüchtiger Mann, der untergeht in dem Wahn: zu Zeiten der Anarchie sei der wohlwollende Kräftige von einiger Bedeutung. Im „Egmont“ waren es festgegründete Zustände, die sich vor strenger, gut berechneter Despotie nicht halten können.⁶⁾

——私は「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」の中で、世界史の一つの重要な時期の象徴を私なりに写し出したのであったが、その後も、国家の歴史上における似たような転換期を、熱心に探し求めた。ネーデルランドの反乱が私の注意をひいた。「ゲッツ」においては、一人の有能な男が、無政府時代には、善意を持った強力な人間がなんらかの意味を持ちうるという妄想を抱き、身を滅ぼしたのであった。「エグモント」において描かれているのは、しっかりとした基盤を持つある状態でも、きびしい、計算ずくの専制政治に対してはもちこたえることができないということであった。——

エグモントは抑圧されている人々に反抗を説こうとはせず、むしろ権力を持つ人々に節度を

6) Dichtung und Wahrheit Vierter Teil 20. Buch

Goethes Werke Band 10 Verlag C. H. Beck München s. 170

求めようとする。ゲーテは作品に手を加え平穩、鎮静へ向うよう介入している。しかし、この方向はテーマにはそぐわない。それ故、反乱者として没落するエグモントより、より人間的であり、人間として勝利をおさめるエグモントに眼を向けるのである。

AUF DEM SEE

Und frische Nahrung, neues Blut
Saug'ich aus freier Welt;
Wie ist Natur so hold und gut,
Die mich am Busen hält!
Die Welle wieget unsern Kahn
Im Rudertakt hinauf,
Und Berge, wolkig himmeln,
Begegnen unserm Lauf.

湖上にて

かくて生新な^{やしない}養分 あたらしい血を
わたしは自由の天地から吸う
わたしを胸に抱く自然の
なんというやさしい心地よさ！
波は權の拍子にあわせ
われらの小舟を揺りあげ
天をつき雲にもまがる山々は
行く手にあってわれらを迎える

(山口四郎訳)

EIN GLEICHES

Über allen Gipfeln
Ist Ruh,
In allen Wipfeln
Spürest du
Kaum einen Hauch;
Die Vögelein schweigen im Walde.
Warte nur, balde
Ruhest du auch.

おなじく

山々は
静かに暮れて
木末^{こぬれ}には
風もそよがず
夕鳥の声
木立ちに絶えぬ
待てしばし
汝^{なれ}もまた憩わん

(山口四郎訳)

Auf dem See は1775年6月チューリッヒ湖上で作られたもので、シュトルム・ウント・ドラング期に属するものである。前稿においても言及したように、小舟の進行とともに、眼前に展開される自然の瞬間瞬間の姿をとらえている。瞬間的に、偶然に支配されたものが存在以上のものになり、その中に真なるもの、本質的なものを見つけだそうとしている。いきなり Und で始まるこの詩は、従来の詩の形式を打破することに夢中であった、シュトルム・ウント・ドラング期のゲーテの代表作でもある。

Ein Gleiches は1780年、ギッケルハーン山頂にある山小屋の板壁に書きつけられたものである。この詩にはもはや比喩や修辭は見られない。形容詞すら用いられず、単純な名詞と動詞とで書かれている。瞬間のうちに意味を求めようとはせず、何の主観もなく山々の嶺を眺めている。そして、遠方の山々の静寂が、樹々に移行し、風の音をささげり、近くの鳥たちから、やがて詩人の心の達するのを静かに待っているのである。ここには、Auf dem See に見られる能動的な自我の主張はない。憧憬も予感も陶醉もない。彼は「詩と真実」⁷⁾において、巨人的かつ反抗的な、天に向かって突進しようとする精神は、私の詩作になら素材を与えてくれなかった。と述べている。自らの夢や願いを奔放な感情にまかせて歌いあげようとしたシュトルム・ウント・ドラング期に比べ、ここには、より自然に対象を見つめようとする深い思慮がみられる。この節度に対する新しい感覚は、以後の、ゲーテの抒情詩に静謐さと調和の美を生み出すことになった。

3

Denn mit Göttern	人々はなんびとであれ
Soll sich nicht messen	神々と
Irgend ein Mensch.	競ってはならないのだ
Hebt er sich aufwärts	空高く昇って
Und berührt	その頭を
Mit dem Scheitel die Sterne,	星たちに触れ得ても
Nirgends haften dann	足は既に支えを失ない
Die unsichern Sohlen,	たよりなく宙に浮いて
Und mit ihm spielen	ただ風と雲とに
Wolken und Winde.	もてあそばれるばかりだ

(山口四郎訳)

これは1781年に発表されたゲーテの詩「人間の限界 (Grenzen der Menschheit)」の第2節でシュトルム・ウント・ドラング期を脱し、古典期への移行時期の作品である。人間は神々と競ってはならない。人間が人間性の限界を知ることによって、初めて神々を知ることができるのである。1774年に発表された「若きヴェルターの悩み」において——どんな人間でも、人間は人間だ。少しばかりの分別をもっている、情熱が荒れ狂い、人間の限界ぎりぎりに追いつ

7) Dichtung und Wahrheit Dritter Teil 15. Buch Goethes Werke Band 10 s. 49

められると、分別なんかほとんど、いや、全然役に立たなくなってしまう。⁸⁾ ——と述べているのは、大きな相違が見られる。もはや、人間の限界に抵抗し苦悩するのではなく、人間の限界を見きわめ、人間として可能な限り努力するという認識である。

Nach ewigen, ehren,	永遠にして不壊の
Großen Gesetzen	大いなる法則に従い
Müssen wir alle	われらはすべて
Unseres Daseins	われらの存在の
Kreise vollenden. ⁹⁾	環を完成しなければならぬ

(山口四郎訳)

この時期、ゲーテは、神々、または神性という言葉をかんに使用している。74年には「プロメテウス」という題の詩を書いているが、直接ギリシャ神話には関連づけていない。あえて、複数形を用いているのも、また、神性という言葉を使用しているのも、直接、神に迫る気はなく、その限界を感じているのである。

このような背景には、ワイマールにおけるシャルロッテ・フォン・シュタインとの関係が重視される。彼女は公爵母堂アンナ・アマーリアに仕える女官で、ゲーテより7才年長、すでに家庭を持っていた。気品があり、教養があり、文学を愛した夫人に、ゲーテは早くから関心を寄せていた。しかし彼女との恋愛関係は、シュトラウスブルクのフリーデリーケや、フランクフルトのリリーと関係とは違ったものであった。彼自身、ラヴァターへの手紙で、——彼女は、ぼくの母、姉、恋人の地位を次々と受けつぎ、自然の伴によるかのように結ばれている。¹⁰⁾ ——と書いているように、彼女は、恋人としてのみならず、人生の伴侶であり、生活全般にわたる指導者でもあった。ゲーテは夫人から奔放な自己を制御することを学ぶのである。彼は夫人とともにスピノザの著作を読んでいる。彼は「詩と真実」において、——あれほど決定的に私に働きかけ、また、私の考え方にあれほど大きな影響力を与えた人物は、スピノザであった。¹¹⁾ ——と記している。ゲーテは自らの特異な本性を把握する手段を、あらゆる方面に求め、ついに、「エチカ」に巡りあうのである。彼はこの書から、何を読みとり、どのような意味を

8) Am 12. August Die Leiden des jungen Werthers

9) 神性 (Das Göttliche) 1783年

10) An Lavater Ostheim vor der Rhön, etwa 20. September 1780
Goethes Briefe Band 1 s. 324

11) Dichtung und Wahrheit Dritter Teil 14. Buch Band 10 s. 35

もちこんだかは説明していない。しかし、——私の情熱が静められるのを感じた。——と、述べているように、彼の感性に広い自由な展望を与えることになった。

Was mich aber besonders an ihn fesselte, war die grenzenlose Uneigennützigkeit, die aus jedem Satze hervorleuchtete. Jenes wunderliche Wort: „Wer Gott recht liebt, muß nicht verlangen, daß Gott ihn wieder liebe“, mit allen den Vordersätzen, worauf es ruht, mit allen den Folgen, die daraus entspringen, erfüllte mein ganzes Nachdenken. Übrigens möge auch hier nicht verkannt werden, daß eigentlich die innigsten Verbindungen nur aus dem Entgegengesetzten folgen. Die alles ausgleichende Ruhe Spinozas kontrastierte mit meinem alles aufregenden Streben, seine mathematische Methode war das Widerspiel meiner poetischen Sinnes- und Darstellungsweise, und eben jene geregelte Behandlungsart, die man sittlichen Gegenständen nicht angemessen finden wollte, machte mich zu seinem leidenschaftlichen Schüler, zu seinem entschiedensten Verehrer. Geist und Herz, Verstand und Sinn suchten sich mit notwendiger Wahlverwandtschaft, und durch diese kam die Vereinigung der verschiedensten Wesen zustande.¹²⁾

——私をとくにひきつけたものは、あらゆる文章から輝き出る完全なる無私の精神であった。「神を真に愛する者は、神も自分を愛してくれることを望んではならない」というあの驚くべき言葉は、その言葉の基礎をなすいっさいの前提と、その言葉から生じるいっさいの結果と共に、私の思索のすべてを満たした。……ここで忘れられてはならないのは、最も密接な結合は、相反するものから生まれるということである。すべてを調和させるスピノザの平静さは、いっさいを揺り動かそうとする私の努力と対照的であった。彼の数学的方法は、私の私的な感じ方、表現方法の正反対のものであった。そして道徳的な問題にふさわしくないとされる、あの規則的な取扱い方法こそが、私をして彼の熱心な弟子とし、決定的な崇拜者としたのである。精神と心情、悟性と感性とが、必然的な親和力でもって互いに相求め、それによって正反対の性質をもつ事物の結合が成立するのである。——

ゲーテは「エチカ」において把握したものは、無私の純粹さと驚くべき静けさであった。そして、それこそ、シュタイン夫人の精神でもあったのだ。揺るぎなく持続する、調和のとれた、不遍的なもの、彼は古典主義の精神を予感するものである。

12) Dichtung und Wahrheit Dritter Teil 14. Buch Band 10 s. 35

4

ゲーテのイタリアへの旅は、ワイマール到着後、10年後になされた。国政への参加による多忙のため、抒情詩以外には、作品らしい作品を完成できなかったゲーテにとって、この旅は、画期的出来事となった。

彼はヴィチェンツァの町に一週間滞在し、16世紀、この町の生んだ偉大な建築家パラディオの作品を見物している。そして、詩人として自分の歩む道を知るのである。

Wenn man nun diese Werke gegenwärtig sieht, so erkennt man erst den großen Wert derselben; denn sie sollen ja durch ihre wirkliche Größe und Körperlichkeit das Auge füllen und durch die schöne Harmonie ihrer Dimensionen nicht nur in abstrakten Aufrissen, sondern mit dem ganzen perspektivischen Vordringen und Zurückweichen den Geist befriedigen; und so sag' ich vom Palladio: er ist ein recht innerlich und von innen heraus großer Mensch gewesen. Die höchste Schwierigkeit, mit der dieser Mann wie alle neuern Architekten zu kämpfen hatte, ist die schickliche Anwendung der Säulenordnungen in der bürgerlichen Baukunst; denn Säulen und Mauern zu verbinden, bleibt doch immer ein Widerspruch. Aber wie er das untereinander gearbeitet hat,völlig wie die Force des großen Dichters, der aus Wahrheit und Lüge ein Drittes bildet, dessen erborgtes Dasein uns bezaubert.¹³⁾

——人はこれらの作品を眼の前にした時、初めてその偉大な価値を知るのである。なぜなら、それらはその実際の大きさと具体性によって眼を満たし、抽象的な正面図のみならず、全体にわたる遠近法上の前進と後退を伴ない、その三次元的美しい調和によってこそ見る人の精神を満足させるべきものである。そこで私はパラディオについて言う、彼は真に内面的に偉大な、そして内部から偉大さを発揮した人間であった、と。この男が近代のすべての建築家と同じく克服しなければならなかった最大の障害は、市民的建築術における柱式の適切な応用なのである。つまり円柱と壁を結びつけることは、やはり矛盾することなのである。しかし彼は何とこの両者をうまく調和させていることか！……それは真なるものと、虚偽なるものから第三のものを形成し、そのものの仮の存在でもって我々を魅惑する、あの偉大な詩人のもつ特殊能力とまったく同じものである。——

13) Italienische Reise Vicenza, den 19. September

これらの認識はイタリアにおいて揺るぎない確信へと高まった。しかし、たとえ芸術家がある境地に達したとしても、眼前にあるものから、最上のものを選び出し、第三のものを形成することができるのは稀有な出来事である。まして、芸術にとって最高の本質的对象である人間を描くことは、なおさら困難なことなのである。人間の形態は、その表面を観察するだけでは把握できない。美しい渾然たる全体として生き生きと波うって躍動するものを、真に観照し模写するためには、形態の内部をあらわにし、各部分を分離し、それらの結合に注目し、相違点を明らかにし、作用と反作用について学び、隠れたもの、不動なもの、現象の基盤を心に銘記しなければならないのである。¹⁴⁾ しかし、対象内容を汲みつくし、芸術にとって必要不可欠なあらゆる条件を満たすには、真なる法則が必要となる。およそ恣意的なものは、すべて崩壊するのだ。

Der echte, gesetzgebende Künstler strebt nach Kunstwahrheit, der gesetzlose, der einem blinden Trieb folgt, nach Naturwirklichkeit; durch jenen wird die Kunst zum höchsten Gipfel, durch diesen auf die niedrigste Stufe gebracht.¹⁵⁾

——みづから法則を定める真の芸術家は芸術の真実に迫り、盲目的な衝動に従う無法則な芸術家は自然の現実にも迫る。前者によって芸術は絶頂にまで高められ、後者によって最低の段階に引きおろされる。——

5

美術史家で、古代ギリシャを再発見し、ドイツにその芸術を紹介したヴィンケルマン（1717～1768）を、ゲーテは早くから崇拝していた。ゲーテの古典主義文学への道は、このヴィンケルマン研究なしには考えられない。

ヴィンケルマンは、1775年に「ギリシャ作品の模倣に関する所論」を書き、それを基礎に「古代芸術史」を汲み立てたのであった。彼は「ラオコーン像」を評し、高貴な簡素 (edle Einfach) と静かな偉大さ (stille Größe) と述べ、ギリシャ芸術の真髓を性格づけたのである。

伝承によると、紀元前1180年頃、ギリシャ軍の思わぬ解放に喜んだトロイの市民は、神々に感謝し生贄を捧げた。それを司どったのが、海神ネプチューンの司祭ラオコーンであった。し

14) Einleitung in die Propyläen Goethe 11 Aufbau-Verlag Berlin und Weimarer 1968
s. 91

15) Einleitung in die Propyläen

かし、2人の息子を伴って祭壇に進み出たラオコーンを、海を渡ってやってきた2匹の大蛇が襲い殺してしまったといわれる。この伝承をもとにラオコーン像が彫られた。これはギリシャ彫刻の中で最高の作品とされるものである。

ヴィンケルマンは、ラオコーンが2人の息子とともに大蛇に巻きつかれ、苦しみ、まさにしめ殺されようとするこの瞬間にも、その表情には、苦悩も、怒りもあらわれていない。これを魂の奥深くつつみこみ、静けさを漂よわせている。と、述べている。

ヴィンケルマンのおこなったギリシャ芸術の紹介は、当時の思想界に、そしてゲーテに強い影響を与えた。高貴な簡素、静かな偉大さ、それはゲーテにとって、真なるもの、善なるもの、すぐれたものは簡素であり、真に高い美は静かな、あらゆる他のものから、ひきはなされた深い直感によってのみ表現されるものとなった。

Es ist ein großer Vorteil für ein Kunstwerk, wenn es selbständig, wenn es geschlossen ist. Ein ruhiger Gegenstand zeigt sich bloß in seinem Dasein, er ist also durch und in sich selbst geschlossen.¹⁶⁾

——芸術作品において、それが独立し、完結しているということは大きな長所である。静止した対象は、存在するだけで自己を表現する。つまり、それ自体において完結している。——

ゲーテはラオコーン論において、すぐれた芸術作品に要求される様々な条件を列挙している。芸術家は理想に到達するためには、深い、徹底的な、ねばり強い精神が必要である。そして対象に節度、限界、現実性、品位を与えるためには、高邁な精神がこれに加わらねばならない。また、優美さを与えるには、芸術法則、即ち、秩序、明白さ、均衡、対照性に従い、これによって対象は優美なものとなる。そして、これらすべてが統一され、調和され、眼前に告知されねばならないのである。

Der Mensch vermag gar manches durch zweckmäßigen Gebrauch einzelner Kräfte, er vermag das Außerordentliche durch Verbindung mehrerer Fähigkeiten; aber das Einzige, ganz Unerwartete leistet er nur, wenn sich die sämtlichen Eigenschaften gleichmäßig in ihm vereinigen. Wenn die gesunde Natur des Menschen als ein Ganzes wirkt, wenn er sich in der Welt als in einem großen, schönen, würdigen und werten Ganzen fühlt, wenn das harmonische Behagen ihm ein reines, freies Entzücken

16) Über Laokoon Goethe 11 s. 110

gewährt, dann würde das Weltall, wenn es sich selbst empfinden könnte, als an sein Ziel gelangt aufjauchzen und den Gipfel des eigenen Werdens und Wesens bewundern. Denn wozu dient alle der Aufwand von Sonnen und Planeten und Monden, von Sternen und Milchstraßen, von Kometen und Nebelflecken, von gewordenen und werdenden Welten, wenn sich nicht zuletzt ein glücklicher Mensch unbewußt seines Daseins erfreut?¹⁷⁾

——人間は個々の力の合理的な適用によって多くのものをなしうる、そして、様々な能力の結合によって特別な事柄をなすことが可能になる。しかし、唯一無比のもの、全く予想外のものは、全特性が彼の内部で調和され、統一された場合のみ可能なのである。……人間の健全なる本性が一つの全体として働く時、また人間がこの世界において一つの、偉大な、美しい、品位と価値ある全体のうちにあると感じる時、そして、この調和に満ちた快適さが人間に純粹でのびやかな歓喜をもたらすならば、その時宇宙は——もし宇宙が自己を感じ得る存在であると仮定すれば——自分の目標に到達したと歓呼し、自己の生成と本質の深みを讃美するであろう。というのも、一人の幸せな人間が自己の存在を無意識に喜ぶだけなら、太陽や惑星や月や星や銀河、彗星や星雲、既成の、あるいは生成しつつある世界、これらすべては何の役に立つというのだろうか。——

これが、彼が見た古代人であった。ワイマールから、イタリアへと展開するゲーテの芸術理論は、シュトルム・ウント・ドラングの精神を離れ、より円熟した古典主義理論へと移行するのである。

Literatur

- Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden Verlag C. H. Beck München
 Goethes Werke Aufbau Verlag Berlin und Weimar 1968
 Gespräche mit Goethe F. A. BROCKHAUS·WIESBADEN
 ゲーテ全集 潮出版社
 Goethes Briefe Christian Wegner Verlag Hamburg
 Emil Staiger: Goethe Atlantis Verlag MCMLVI
 Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung Vandenkoech & Ruprecht in Göttingen
 Fritz Martini: Deutsche Literaturgeschichte Alfred Kröner Verlag STUTTGART
 Klassik Erläuterungen zur deutschen Literatur Volkseigener Verlag BERLIN
 Begriffsbestimmung der Klassik und des Klassischen Wissenschaftliche Buchgesellschaft
 Victor Lange: Das klassische Zeitalter der deutschen Literatur 1740-1815 Winkler Verlag München
- 17) Winkelmann Goethe 11 s. 260 s. 261